

報 告

看護学科・専攻科地域看護学専攻で育てたい学生像の検討

和泉 明子^{1*}, 矢野 智恵¹, 政平 憲子¹, 高藤 裕子², 大西 昭子²,
吉田亜紀子¹, 今村 優子¹, 山本 和代¹, 中岡 亜紀¹, 小野 文子¹, 梶本 市子¹

要約: 私たちは、講義や実習を行う中で、言葉の意味の理解が難しい、計算問題に困難さを示す、自分の思考や感情を言語化することができないといった特性を持つ学生が気になり始めた。また、これらの学生を社会の期待に応えることができる看護師レベルまでに育て上げることの難しさを感じるようになった。

そのような中で、臨床で求められる能力を兼ね備えた人材を送り出すためには、まず、理想の学生の私たちのイメージを明確にする必要があり、そしてその学生像を目指し、効率的に自分たちの学生を教育しなければならないと考えた。

そこで、今回「私たちが育てたい看護学生像」についてまとめることとした。その結果、【基本的な態度や習慣（学習の基盤となるもの）】【看護学生として育てていきたい力（中核）】【科目によって修得していくもの（科目における教授内容）】の3つの局面が明らかとなったため「私たちが育てたい看護学生像」と成果及び今後の課題について報告する。

キーワード: 看護教育, 看護学生, 基礎学力, 思考する力

I. はじめに

我が国は、超高齢化社会を迎え、今後も看護は、ますます必要とされていくことが予測される。そして、在院日数の短縮化に伴い医療の主体は在宅・地域へと移行しており、看護師には、主体的に行動する力や対象を包括的に分析する力が求められるようになってきた。また、病院においても、高度な医療と多重課題に対応できる能力を期待されている。

しかし、多くの看護師を輩出するべく看護学部を増設が進む中、学生の質も幅広くなってきている。ベネッセ教育総合研究所の「高大接続に関する調査」¹⁾によると、学生の学力低下が問題になっ

ていると回答した大学は、全体の75.8%であり、全国的に大学教育の水準に満たない学生が多いことが明らかとなっている。

高知学園短期大学看護学科・専攻科地域看護学専攻でも、講義や実習を行う中で、言葉の意味の理解が難しい、計算問題に困難さを示す、自分の思考や感情を言語化することができないといった特性をもつ学生が気になり始め、これらの学生を、社会が期待する看護師に育て上げることの難しさを感じるようになった。一方、教育再生実行会議では、大学は、「社会人基礎力」や「基礎的・汎用的能力」などの社会人として必要な能力を有する人材を育成するために、教育方法の質的転換を

¹高知学園短期大学 看護学科 *Email: aizumi@kochi-gc.ac.jp

²高知学園短期大学 専攻科地域看護学専攻

図る必要があるといった、これからの大学教育の在り方²⁾について言及しており、それに伴い各大学は改革を進めている。文部科学省の大学における教育内容等の改革状況についての報告（平成26年度）において、ボランティア活動を取り入れた授業科目を開設している大学は56.2%であり、増加傾向にあること³⁾などから、教えられるのではなく、主体的に学ぶ学生を育てようとする取り組みを始めていることが理解できる。

われわれも、現代の学生の特徴を捉えながら、効果的な教育を行い、臨床で求められる能力を兼ね備えた人材を送り出すために、今後の看護基礎教育を根本的に見直す必要がある。それには、まずどのような学生を育てたいのかを明確にし、教員が共通理解するべきだと考えた。また、目指す学生像を現実のものにするために、学習成果およびアドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシー（以下3つのポリシーとする）とどのようにつなぐかを考える必要があった。

そこで今回、看護学科・専攻科地域看護学専攻では、育てたい看護学生像の検討を行ったことから目指す学生像と、現時点での成果や今後の課題について報告する。

育てたい学生像が明らかとなることで、学習成果および3つのポリシーをより具体化することができ、それぞれの領域における教育に反映させることができると考える。また、教員間で目指す方向性について共通認識をもつことで、入学から卒業までの教育課程に繋がりができ、連携をもちながら教育に臨めるという意味からも、その結果は有益だと言える。

II. 方法

1. 私たちが育てたい看護学生像の検討

看護学科・専攻科地域看護学専攻の教員全員で、「私たちが育てたい看護学生像」を具体的に明文化したものを付箋にできる限り出し合い、検討委員のメンバーでKJ法にてまとめた。

2. 私たちが育てたい看護学生像の内容の検討

検討委員より提案された「私たちが育てたい看護学生像」について、教員間で内容の共通理解を図るとともに、その内容が看護基礎教育内容として妥当かどうかを検討するために、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」を基準に整合性を確認し、ブラッシュアップを行った。

3. 期間

平成28年11月～平成29年3月

4. 倫理的配慮

1) 得られたデータは、個人が特定できないように扱った。

2) 得られたデータは、鍵のかかる場所で保管した。

3) 得られたデータは、研究終了後シュレッダーで処理する。

III. 結果

1. 私たちが育てたい看護学生像

私たちが育てたい看護学生像として抽出された6つのカテゴリーは、【基本的な態度や習慣（学習の基盤となるもの）】【看護学生として育てていきたい力（中核）】【科目によって修得していくもの（科目における教授内容）】の3つの局面に分類された。

以下本文中に【 】は局面を、[]は大カテゴリーを、《 》は中カテゴリーを、〈 〉は小カテゴリーとして表記する。

1) 基本的な態度や習慣(学習の基盤となるもの)

【基本的な態度や習慣(学習の基盤となるもの)】とは、学習場面だけでなく、家庭での生活も含めて、日常生活上の基本的な習慣と道徳的な姿勢をもつことであり、[看護学生として学ぶための基本的な習慣を身につけることができる]、[看護専門職者として求められる態度が培われる]の2つの大カテゴリーが抽出された。(表1.)

(1) [看護学生として学ぶための基本的な学習を身につけることができる]とは、大学の規則に従って授業に臨み、学習の計画を立て、自分の身になる方法で学習するという術を知っていること

であり、《日常生活における自己管理ができる》《社会的規範が身についている》、《基礎学力と学習する態度が身についている》の3つの中カテゴリで構成されていた。これらは毎日の学習を行うための基盤になるものである。

(2) [看護専門職者として求められる態度が培われる]とは、看護専門職者を目指す学生には、基本的に備えておいてもらいたい倫理的・道徳的態度のことであり、《看護師としての品性を備えている》、《他者を尊重した行動がとれる》、《他者と適切なコミュニケーションがとれる》の3つの中カテゴリで構成されていた。これらは、看護の対象と向き合う際に、そしてチームで協働する際にも欠くことのできない要素である。

2) 看護学生として育てていきたい力 (中核)

【看護学生として育てていきたい力 (中核)】とは、修業までの毎日の学びや、実習での多くの体験を通して、思考・統合する力や、自己洞察する力、そして看護専門職者になるという自覚をもつことであり、[知識や技術を学びや経験から修得することができる]、[自己を客観的に理解し表現ができる]、[看護専門職者としての自覚をもつことができる]の3つの大カテゴリが抽出された。(表2.)

(1) [知識や技術を学びや経験から修得することができる]とは、学んだ知識や技術を自らの体験とつなげて考え、その意味を理解し、表現することであり、《考える力を身につけている》、《つながる・つなげる力をもちことができる》、《経験から学ぶことができる》、《適切な表現力を兼ね備えることができる》、《学びを統合することができる》の5つの中カテゴリで構成されていた。これらは、知識や技術を単にもつだけではなく、それらを看護の対象に臨機応変に活用していくために必要な能力であり、教員が意識的につないでいくことで身につく力である。

(2) [自己を客観的に理解し表現ができる]とは、看護の対象に向き合い、チームで協働する自己を客観的に見つめることができ、その思考や感情を素直に他者に表現できることであり、《自己を知

り、認めることができる》、《自己の考え(気持ち)を適切に表現できる》の2つの中カテゴリで構成されていた。

(3) [看護専門職者としての自覚をもつことができる]は、自分が看護専門職者になるという自覚を持ち、看護の対象やそれを取り巻く環境に関心を持って必要な役割を果たすべく努力できることであり、《より良いケアを行うために広く社会に関心をもつことができる》、《リスクを含めた状況を判断し、適切な対処ができる》、《チームの一員としての自覚を持ち、自己の役割を果たすことができる》、《看護の価値を認識できる》の4つの中カテゴリで構成されていた。

3) 科目によって修得していくもの (科目における教授内容)

【科目によって修得していくもの (科目における教授内容)】とは、科目の講義や演習・実習などの教授から身につけておくべき知識や技術のことであり、[広く対象を捉え、よりよい看護の展開ができる]の大カテゴリが明らかとなった。(表3.)

(1) [広く対象を捉え、よりよい看護の展開ができる]とは、知識をもって看護の対象を注意深く観察し、アセスメントした結果、コミュニケーションを取りながらケアを提供することができ、さらにそれを評価・修正できる力のことであり、《ケアに生かせる知識をもっている》、《アセスメントに基づき必要なケアの判断ができる》、《対象と援助関係を築くことができる》、《基礎的な看護技術が習得できる》、《対象者の価値観を尊重した援助ができる》、《対象に応じた看護ケアを計画して実施できる》、《看護の対象と場を広くとらえることができる》、《看護実践を振り返り修正することができる》の8つの中カテゴリが抽出された。これらは、看護専門職者の軸となるものと言える。

2. 私たちが育てたい看護学生像の内容の検討

検討委員より提案された「私たちが育てたい看護学生像」について、教員間で内容の共通理解を図りながら文言やカテゴリ内容の修正を図ると

ともに、文部科学省より示された「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」の内容との整合性を確認した。

「私たちが育てたい看護学生像」に含まれた内容は、「学士課程においてコアとなる看護実践能力と卒業時到達目標」の5つの能力群と20の看護実践能力の内容に対応できていることが分かった。また、20の看護実践能力の詳細を確認することで、例えばⅡ群の8)地域の特性と健康課題を査定(Assessment)する能力、Ⅲ群の10)健康の保持増進と疾病を予防する能力のように、看護学科3年課程では到達できないが、専攻科地域看護学専攻に進学することで獲得できる能力、あるいはⅡ群の4)根拠に基づいた看護を提供する能力などのように看護学科でも学ぶが、専攻科地域看護学専攻に進学することでさらに強化できる能力が何であるのかを明らかにし整理できた。

Ⅳ. 考察

結果より「私たちが育てたい看護学生像」が明らかとなった。これらの看護学生像が抽出された背景には、入学してくる学生の特徴や、看護学教育がおかれている社会情勢の変化など、いくつかの課題が関連していることが考えられた。

そこで、それらを踏まえたうえで、その学生像をめざし、教員が今後どのように取り組めばよいかについて、以下の4点に焦点を当てて考察する。

1. 学生の基礎学力向上への取り組み

教員は、自らが受けた教育のスタイルを脱し、新たな教育方法を創造していく必要がある。まず急務であるのは、学生の基礎学力の向上である。

看護学科の専門教育科目を学ぶ上で、教科書に載っている言葉の意味を理解し、考え、応用していくためには、基礎学力が必須であるが、結果に《基礎学力と学習する態度が身についている》が挙がっているように、本学の学生も全国の例にもれず、支援の必要があると考える。また、看護師国家試験の問題も、長文が増え、何を問われているかを読み取る力が必要になってきていることから対策は急ぐ必要がある。

全国的に、「初年次教育として、論理的思考や問題発見・解決能力の向上のためのプログラムを実施している大学数は、平成21年からの5年間で43%から63%に増加している」⁴⁾ように、入学前からの取り組みが必要である。本学看護学科でも取り組んではいるが、効果的なものになっているとは言えない状況である。さらに、1年次の空き時間や、夏休みを利用して取り組みを行っているが、これも手ごたえのあるものにはなっていない。

課題は、看護学科の教員が、自身の専門領域以外のことに取り組まなければならない、基礎学力が十分ではないことは理解できても、具体的にどの部分が欠けていて、どのような教授方法で身につけていくことができるのかを知らないことにあると考える。さらに教員の講義や実習・研究以外の時間の使い方については物理的な限界もある。

教員は自身の専門領域の内容をどう学ばせるかということ以外に、基礎学力をつけるための効率的な教授方法について、自ら学習する必要がある、学科全体で取り組んでいくべきだと考える。

2. 個々の学生を尊重し積極的に関わること

中山⁵⁾も述べているように、現代の学生は常識がない、意欲がないと言われて久しいが、今回の結果にもそれが表れている。しかし、実は学生なりに考え、行動しているということを彼らとの対話によって解ることがある。このように、体験がないばかりに、単に、知らなかっただけであつたり、解っていてもうまく表現できずにいたりしたことで悪い評価を受けることも少なくない。

ベネッセ総合教育研究所の「第3回大学生の学習・生活実態調査」⁶⁾でも大学入学時の気持ちについて「自分の将来を見つけない」「将来の仕事に役立つような力を身につけたい」「専門分野について深く学びたい」と答えた学生はいずれも8割を超えており、大学教育に対して大きな期待を持って入学して来ていることが理解できる。

つまり、社会に出るには未熟であるが、そこに悪意はなく、希望や意欲を持っている学生も多くいるということである。この学生の希望や意欲については、講義や演習・実習を通しての関わりだ

けでなく、毎日の生活の中で培われていくものなので日々の何気ないところでの学生というものを意識しなければならないと考える。大学では、学生主体にという大義名分のもと、放任するのではなく、未熟ながらもそこで学ぼうとする学生個々を大事に、はぐぐみ育てる意識をもって関わる必要があるのではないかと考える。教員は、自分と全く価値の異なる学生に毎日驚かされているが、看護専門職者を育てる以前の、ひとを育てる覚悟をもって積極的に関わるのが大切だと考える。

3. 主体的に学ぶ力と思考する力

ベネッセ総合教育研究所の「第3回大学生の学習・生活実態調査」⁷⁾によると、グループワーク・プレゼンテーションなどのアクティブラーニング型の授業を受ける機会が、この8年間で大幅に増加していると報告されている。このように、各大学とも体験型の学びを増やすことで、主体的に思考する力を養うことを目指している。

主体性は、何かについて“知りたい”という興味や関心、そして疑問を持つことによって自ら探索しようとするのだが、すべてを提供されてしまうとそれらは湧いてこない。資料を渡し、すべてを教授するのではなく、課題を与え、それを調べたり、学生同士でディスカッションを行ったりすることで知りたい欲求が満たされていくという体験ができる。さらにその体験から主体的に学ぶという姿勢が身についていくのだと考える。

しかし、同じく「第3回大学生の学習・生活実態調査」⁸⁾によると、主体的に学ばせたいと考える大学側の意向に反し、「大学での学習方法は、大学の授業で指導を受けるのがよい」「大学生活については、大学の教員が指導・支援する方がよい」と回答した学生が増加しており、受け身で、依存的な現代の学生の姿勢がうかがえる。よって、教員は、今後も積極的に、自ら進んで学習できるスタイルの講義や演習を組み立てる必要がある。

これについて、森田は、「GW（グループワーク）を行えば思考が活性化してアクティブラーニングになるわけではない。GWをアクティブラーニングにするには、教員の教育的配慮と仕掛けが必

要である」⁹⁾と述べ、看護倫理学にルーブリックを取り入れた学生主体の取り組みについて紹介している。我々も、単にグループワークを取り入れたり、課題を提示するだけでなく、学生が主体的に動き出そうとする工夫や、思考しなければならない仕掛けを講義や演習・実習場面に取り入れていく必要があり、その方法について学ばなければならない。そして、教えられるより自ら学ぶことが、また、思考することが、“面白い”と思ってもらえることを目指したい。

4. 実習での体験をいかに重要視できるか

現在の臨地実習は、病棟の急性期化や在院日数の短縮などにより、ゆっくり患者を受け持ち、しっかり考えながら学ぶことが難しくなっている。また、患者の権利を守り、安全・安楽を優先することで、学生が実施できることも、体験できることも減ってきている現状がある。さらに指導する教員の不足、多忙な実習指導者との連携の難しさなど課題は山積みである。

しかし、看護専門職者には、欠くことのできない《考える力を身につけている》、《つながる・つなげる力をもつことができる》、《経験から学ぶことができる》、《学びを統合することができる》などは、臨地実習でこそ培われるものである。初めての体験で、感動することや困惑することもあるかもしれないが、その気持ちの揺れも大きな体験のひとつであり、それがあからこそ知識や技術がインパクトをもって定着する。また、座学の学びと体験をつなぐことによって、エビデンスが明確となっていく。こうした学生の成長は、教員や指導者が積極的につなぐ作業を行うことで確かなものになる。厳しい実習環境の中で、その役割を担わなければならないということを教員は自覚し、実習に臨まなくてはならない。

そして、この環境だからこそ、より良い学びのための工夫や創造力が必要だと考える。たとえば、ある大学では、1年前期にコミュニケーション実習という科目を履修し、ここで、患者-看護師関係の重要性を理解し、関係を築き深めるためのコミュニケーションの概念や方法を学んでいる。ま

た、横井は、文部科学省補助金事業「課題解決型高度医療人材育成プログラム」として「いえラボ」という生活推測を学ぶ実習を行っている¹⁰⁾。このように、これまでにない新しい実習のスタイルを考えていく必要があるのかもしれない。より学びの深い実習を展開し、多くの体験をすることで、最後には自分の理想の看護専門職者への夢や希望をもってもらえることを期待したい。

V. 成果と課題

今回「私たちが育てたい看護学生像」をまとめ上げることで、教員の共通理解が図られた。これは今まで自分たちが考えていた学生像が、お互いに同じものであったことを確認することができたという意味では、1つの成果だと言える。また、皆が同じ目標に向かっていけるようになったことも成果である。

次に「私たちが育てたい看護学生像」を絵に描いた餅にしないためにクリアしたい課題が多くある。

1つは、教員がそれぞれの領域で、どのような工夫や仕掛けを考え、講義や演習・実習を展開できるかということである。学科全体で学びながら変革を目指したい。

2つ目は、考察にも挙げた効果的な実習の方法について考えることである。これは病院・施設などのフィールドが必要であるため、教員個人の努力だけでは解決が困難ではあるが、連携をとりながら考えていく必要がある。

3つ目は、今回明らかになった「私たちが育てたい看護学生像」の内容の、各学年の到達目標の設定である。例えば、1年次、2年次、3年次、専攻科など、学年ごとに何をどこまで重点的に取り組むのか、つきたい力は何かの目安を作ることである。それは科目の中で可能となるもの、あるいは日常生活の中の取り組みで、あるいは課外活動の中の取り組みで可能であるものかもしれない。そして、そのつきたい力を育てるために、教

員としてどのような関わりが必要となるのかを明らかにしていくことである。それにより、無意識の関わりを意識することで、意味のある意図的な関わりができるようになると思う。

付記

本稿の主たる概要は、第1回高知学園短期大学FD・SD活動研究発表会にて発表された。

引用文献

- 1) ベネッセ教育総合研究所 (2013): 高大接続に関する調査, www.berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=3984 (平成29年10月24日アクセス)
- 2) 文部科学省 これからの大学教育のあり方について(第三次提言)平成25年12月13日 www.kantei.go.jp/jp/singi/kyouikusaiei/pdf/dai3_1.pdf. (平成29年10月24日アクセス)
- 3) 平成26年度の大学における教育内容の改革状況について (平成28年12月13日): 文部科学省高等教育大学振興課大学改革推進室 www.mext.go.jp/a_menu/koutou/daigaku/.../1380019.htm. (平成29年10月24日アクセス)
- 4) 前掲3)
- 5) 中山洋子 (2010): 看護学基礎教育のこれからの方向性, 日本看護学教育学会誌, 20, 47.
- 6) 木村治生 (編集) (2017): 「第3回大学生の学習・生活実態調査」速報版, ベネッセ教育総合研究所, 6.
- 7) 前掲6) 12.
- 8) 前掲6) 11.
- 9) 森田敏子 (2017): ルーブリックのマトリックス作成とその意義, 看護教育, 42(8), 68-74.
- 10) 横井郁子 (2017): 看護基礎教育における生活を推測できる教育とは, 看護教育, 42(8), 17-18.

受付日: 平成29年11月9日

受理日: 平成29年12月25日

表1. 基本的な態度や習慣（学習の基盤となるもの）

[看護学生として学ぶための基本的な習慣を身につけることができる]

中カテゴリー	小カテゴリー
日常生活における自己管理ができる	スケジュール管理ができる
	基本的な生活習慣が身についている
	自己の健康管理ができる
社会的規範が身についている	ルール・規範・規律が守れる
	TPO に合わせた挨拶ができる
	マナー・道徳を兼ね備えている
基礎学力と学習する態度が身についている	学習姿勢・学習態度・勉強の仕方が身についている
	基礎的な国語能力・計算能力が習得できている

[看護専門職者として求められる態度が培われる]

中カテゴリー	小カテゴリー
看護師としての品性を備えている	責任感を持っている
	何事にも誠実である
	謙虚な態度（素直さ）がある
	やさしさがある
他者を尊重した行動がとれる	他者（人）に関心をもつことができる
	相手の立場に立った考え・行動ができる
	プライバシー（個人情報）が守れる
	多様な価値観を認めることができる
他者と適切なコミュニケーションがとれる	聴く態度・注意深く聞き取る力がある
	基本的なコミュニケーションをとることができる

表2. 看護学生として育てていきたい力（中核）

[知識や技術を学びや経験から修得することができる]

中カテゴリー	小カテゴリー
考える力を身につけている	疑問をもつことができる
	現象の背景を考えることができる
	物事を多角的に見て考えることができる
	物事を柔軟に考えることができる
	思考を発展させていくことができる
	答えがなくても諦めずに考え続けることができる
つながる・つなげる力をもつことができる	自分から人とつながることができる
	必要な資源をつなぐことができる
経験から学ぶことができる	生活体験と学習をつなげて考えることができる
	知識と経験をつなげることができる

適切な表現力を兼ね備えることができる	根拠をもって説明し他者を説得することができる
	必要な社会資源を発信していくことができる
	伝えたいことの焦点を絞ってプレゼンができる
学びを統合することができる	得た知識を活用して考えることができる
	学んだことをリセットせずに結びつけることができる

[自己を客観的に理解し表現ができる]

中カテゴリー	小カテゴリー
自己を知り、認めることができる	自己洞察ができる
	自分も他者も大切にできる
自己の考え（気持ち）を適切に表現できる	言語化できる
	自信をもって行動や発言ができる
	困ったときに相談できる

[看護専門職者としての自覚をもつことができる]

中カテゴリー	小カテゴリー
より良いケアを行うために広く社会に関心をもつことができる	生涯学び続ける必要性が分かっている
	社会への関心をもっている
リスクを含めた状況を判断し、適切な対処ができる	リスク管理ができる
	状況を判断して報告・連絡・相談ができる
チームの一員としての自覚を持ち、自己の役割を果たすことができる	リーダーシップがとれる
	チーム・協力・連携・コーディネートできる
看護の価値を認識できる	看護の仕事に希望をもっている
	看護師としての責任が理解できる

表3. 科目によって修得していくもの（科目における教授内容）

[広く対象を捉え、よりよい看護の展開ができる]

中カテゴリー	小カテゴリー
ケアに生かせる知識をもっている	人体の構造と機能が理解できる
	病態と治療法が理解できる
	主要症状に対する看護が理解できる
	日本の疾病構造と健康課題が理解できる
	個人・家族のライフサイクルと発達課題が説明できる
	保健医療福祉制度の基本がわかる
アセスメントに基づき必要なケアの判断ができる	根拠に基づいたアセスメントができる
	対象の情報を整理することができる
	数的なデータを読み取り判断することができる
	対象者の生活をふまえて真のニーズを把握することができる

対象と援助関係を築くことができる	信頼関係を築くことができる
	看護の対象に向き合うことができる
基礎的な看護技術が習得できる	看護技術の原理原則が説明できる
	基礎的な看護技術を安全に実施できる
	基礎看護技術が正確に実施できる
対象者の価値観を尊重した援助ができる	対象者の望む生活を大切にしたいケアができる
	患者や家族が理解できるようなケアの説明ができる
	対象者の意思決定を支援することができる
対象に応じた看護ケアを計画して実施できる (Ⅱ-5、Ⅱ-8)	個別性のあるケア計画が立てられる
	健康課題を解決するための方策を企画立案できる
	対象の強みを見つけ引き出すことができる
	対象者に応じた健康教育の実践ができる
	家庭訪問を実施することができる
	地域診断をすることができる
看護の対象と場を広くとらえることができる	予防の視点に立って看護が展開できる
	地域や集団を看護の対象として捉えることができる
看護実践を振り返り修正することができる	自身のケアを常に振り返ることができる
	看護ケアを評価することができる

Report

A Study of “The Image of The Nursing Students We Wish to Raise”

Akiko IZUMI^{1*}, Chie YANO¹, Noriko MASAHIRA¹, Yuko TAKATO², Akiko OONISHI²,
Akiko YOSHIDA¹, Masako IMAMURA¹, Kazuyo YAMAMOTO¹, Aki NAKAOKA¹,
Fumiko ONO¹, Ichiko KAJIMOTO¹

Abstract: In lectures and practical trainings, we began to worry about the students who have difficulty in understanding the meaning of the words, solving simple math problems, and putting their thoughts and emotions into words. We also came to have difficulty in raising these students to the level of the nurses who can meet society's expectations.

In such a situation, to send human resources having the abilities to be required in clinical practice, we thought that it is necessary to clarify our image of an ideal nursing student, and that we must educate our students effectively in order to raise such an ideal student. Therefore, we summarized the study on “The image of the nursing students we wish to raise”. As a result, the following three aspects became clear : 【The basic attitudes and habits (the foundation of learning)】, 【The necessary abilities to grow as a student (core)】, and 【The knowledge and skills acquired by specialized studies (contents of the teaching in the subject)】. We report on “The image of the nursing students we wish to raise”, the results and future tasks.

Key words: nursing education, nursing student, basic knowledge, basic thinking ability

¹ Kochi Gakuen College, Department of Nursing, *Email: aizumi@kochi-gc.ac.jp

² Kochi Gakuen College, Advanced Course in Community Health Nursing